

宮崎滔天全集

第一卷

宮崎滔天全集

第一卷

平凡社

宮崎滔天全集 第一卷

昭和四十六年七月二十九日 初版第一刷發行

編者 宮崎龍介  
みやざきりゅうすけ

小野川秀美  
おののかわひでみ

發行者 下中邦彦  
しもなか くにひこ

發行所 株式會社 平凡社  
たけだ へいぶつ しゃ

東京都千代田區四番町四番地  
郵便番號一〇二  
電話 (二六五)〇四五  
一 振替 東京八一二九六三九

印刷 株式會社 共立社印刷所  
製本 株式會社 石津製本所

## 凡 例

一、本全集は宮崎滔天の著述、談話、筆談記録、書簡などを未発表のものをふくめて現在可能なかぎり蒐集し、これに若干の關係資料を附して編輯したものである。

二、原稿收録にあたり既發表のもので原稿の失われたものは、それがはじめて發表掲載されたときのものを底稿とし、『三十三年之夢』（第一卷所收）と『狂人譚』（第三卷所收）にはとくに異本相互のあいだの異同を校訂したが、その他の收録文にはどこした校訂、編註は本文中に「」内に8ポイント活字で表示した。

三、收録文は原稿、底稿に忠實であることを原則としたが、編集上、原文を次のように改めた。

- (イ) 必要に応じてルビを附し、新かなをもつて表記した。
  - (ロ) 句讀點、改行、字下りなどの扱いは、讀解の便をはかって通行の方式にしたがった。
  - (ハ) 清音、濁音は通行の用法に改めた。
  - (ニ) 文中の會話、引用文に「」をほどこした。
  - (ホ) 書名、新聞名、雜誌名には『』を、その他の著作名には「」をほどこした。
  - (ヘ) 變體かなは平かなに改めた。
  - (ロ) 圈點は原則として省いたが必要に応じて一部を残した。
  - (イ) 白文の漢文、漢詩には必要に応じて句讀點、返り點を附した。
- 四、原文のかな遣い、送りがなは、歴史的用法、著者獨特の用法などが混用されているが、敢えて統一しなかつた。

五、明らかな誤字、誤記は改めたが、現在通行の用法では誤字、誤記に類する用法も文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかった。

六、促音は原文のままとし、捨てがなを使用しなかった。

七、正誤を判断しかねる用語、用法にはママと傍記した。

八、人名などの固有名詞には著者の誤記と思われるものもあるが、あるいは著者の意識的な表記であるかも知れぬことを考慮して敢えて改めず、同一著述内で初出のさいに「」内に８ポイント活字で註記し、再出以降のものにはとくに註記しなかった。

九、原文不明の箇所は、不明の字數だけ□で示した。

十、原文（ ）内の文章はすべて８ポイント活字にした。

十一、収録各文の發表時の署名、發表紙誌名、發表年月日は卷末の解題で解説を加えたが、また各中扉の裏にも附しておいた。

本全集の編輯にあたっては資料の提供をはじめとしてつぎの機關の御協力を得た。記して厚く感謝の意を表する。國立國會圖書館、明治新聞雜誌文庫、早稻田大學圖書館、長崎縣立圖書館、西日本新聞社。

編集委員 宮崎 龍介

小野川 秀美

『三十三年之夢』校訂について

一、底本は、東京國光書房發行『三十三年之夢』明治三十五年第八版に滔天じしんが訂正加筆を施しておいたもの、故宮崎龍介氏藏。

二、書名は國光書房本は、表紙、扉、自序、は「三十三年之夢」、本文冒頭、大尾、奥附の標題は「の夢」、滔天はべつに手訂を加えていない。『二六新報』はすべて「の夢」、ただ冒頭の「告白」では「之夢」。つまり、いくらかあらたまつた言いかたでは「之夢」なのであろう。

三、校訂の主眼は、滔天の手訂にもとづくテキストを作成し（その點では吉野作造校刊明治文化研究會本、宮崎龍介校刊文藝春秋社本、宮崎龍介衛藤瀧吉校註平凡社本とおなじ）、且つ、滔天の手訂のあとをいちいち指摘すること、である。裏からいえば、國光書房本、つまり最初の單行本のテキストを間接的に再現することにもなる。もちろん、『二六新報』連載のもの、單行本、手訂、と三者を對校すれば最上であるが、あまりに煩雜となるので見合せた。『二六新報』と國光書房本とのあいだには、たしかに、文章に相當の異同がある。そのうち重大なものは、本全集第四卷に收める註釋において言及するであらう。

四、滔天の手訂のあとを指摘するには、まず、本文の當該文字の左側、もしくは文字と文字の中間左側に「・」を附して所在を示し、ついで、各奇數ページ末においてもとの國光書房本との對照を註記した。すなわち、二五ページ七行目「嗚呼半生夢醒めて落花を懷ふ」に對して、註記に

(左7)・落花〓獨り落花

とあるのは、左ページ第七行目の「落花」の上に國光本ではもと「獨り」の二字があった、その「獨り」の二字を滔天が赤インクで抹消し去っている、ということである。また

(8) 意氣地<sub>レ</sub>之

は、おなじページ第八行目の「何ぞ意氣地なきの甚しきや」は國光本ではもと「何ぞ之なきの……」となっていた、その「之」一字を赤インクで「意氣地」三字に改めてある、ということである。また

(9) 不羈<sub>レ</sub>此の如く (9)なるが如<sub>レ</sub>ナシ

によれば、おなじページ第九行目の「不羈磊落なるが如にして」一字は國光本ではもと「此の如く磊落にして」九字であったことを知りうるであろう。もともと、手訂はないけれども本文を改めた場合がごく稀にあるが、そのときは「<sub>レ</sub>」を用いて理由を示しておいた(たとえば九ページの「タマラヌ」)。すべて「<sub>レ</sub>」の中は校訂者のことばである。

五、明白な誤字、脱字は、ことわりなしに訂正した(但し、滔天じしんが訂正しているものは單なる誤植の訂正でもすべて註記した)が、それ以上にすすんで、たとえば「戀る」(ある場合、ルビによれば「ほれる」であるらしい)催す(ある場合、ルビによれば「うながす」であるらしい)を「惚れる」「促す」に改めるなどのこと、また「爲めに」と「爲に」、「如くに」と「如に」の類を統一したり、送りガナの送りすぎ、送り足らず、誤り、を訂正したりなどのことは、一切しなかった。とくに固有名詞の場合、新架坡と新嘉坡、アギナルドとアギナルド、海州と海洲、大崎と太崎など、いっさい統一しなかった。滔天が○太○をたてつづけに西太皇と手訂している如きは、單なる偶然の筆の誤りなること明白であるが、これも本文ではそのままにしておいた。なお、變名や伏せ字を手訂において本名に改めてある場合など、くりかえしあらわれるときは、最初一、二回(時にはしばらくおいても一回)にのみ註記し、以後はただ本文中に傍點を附するにとどめた。もともと氏名の手訂は、餘りに頻繁なる場合、手訂漏れのことがあり、その際は手訂してあるものとして處置したが、時にはまた、數ページ前には伏せ字にしておきながら、いつしか堂々

と本姓名が出てくる場合（たとえば一四三ページの西太后）もある。そのようなときは、もちろん「・」も註記も加えない。

六、變體カナは普通のカナに改め、決と決、竊と窃、鬱と鬱などの混用の類は、どちらかに統一した。句讀は原文では讀點（、）で通してあるのでそれに従った。讀點は、ごくまれに、校訂者の意をもって補ったこともある。漢詩の場合など、ときとして、各句の末に句點（。）が施してあるのは、削った。聖書の引用で、讀點をほとんど打っていない場合は、そのまましておいた。原文における『』と「」の混用は、大體において、「」に統一した。しかし、あたらしく「」を加えたところはない。

七、原文（國光本原文、さかのぼっては『二六新報』掲載のもの）は總ルビである。それは大體においてよくできていて、滔天じしんの指示によったものが多いのではないかとすら思われるが、いま一律に削った。今後あるべき作業として、このルビを活用して大膽にアテ字的漢字をへらしカナをふやしたテキストの作成が希望される。

八、滔天の手訂は眉批（多くの場合「欄外見出し」というのが、むしろ當っていようが）の部分には殆んど及んでいないので、手訂を経た本文とくいちがいの生ずることを、時として、免れない。そのような際は眉批の削除など、相當大膽な校訂をおこなわざるを得なかった。もちろん、それらはすべて註記しておいた。

九、手訂本（現状は一枚一枚ばらばらにときほぐされている）は、本文のところは完全に存在するが、序文、目次の箇所は、吉野作造博士の校訂のときは確かに存在していたはずであるが、いつか散逸したものらしい。それで諸家の序については、國光本第八版と吉野本とを對校し、ごく形式的な點以外とりたてていべき異同もないので、ほぼ吉野本に従った。自序の部分にはあきらかに滔天手訂の痕跡がみとめられるので、國光本を本文として採ったうえ、手訂による異同と思われるものをいちいち註記した。目次は、國光本のそれをわれわれの校訂した本文の章題、眉批、と對校した。その際、本文眉批で「反照自省」が目次で「反省自責」となっている如き異同はあえて放置し、ただ、本文手訂の結果削るべきことのあるものには「」を加え、本文で手訂をへている姓名には傍點を加えてお



いた。

十、附録とした告白や諸氏の書簡は『二六新報』に載せられて以後、國光本以下の諸本は探っていない。それで窃と竊、況と況の類を統一したくらのほかは、「ママ」「？」などの符號を付するにとどめておいた。「？」は、印刷不鮮明でよみとりにくいがほぼこの字であらう、という意味である。

なお校訂にあたっては、河田悌一氏の熱心な協力を得た。深く感謝する。

島田 虔次

目 次

凡 例

『三十三年之夢』校訂について

I

三十三年之夢……………五

落花の歌……………三三

續三十三年之夢……………三六

清國革命軍談……………四四

支那革命物語……………五一

II

幽囚録……………四九

孫逸仙……………四七〇

孫逸仙	四七四
孫逸仙は一代の大人物	五〇四
桂太郎と孫逸仙	五〇九
革命黨領袖黃興と語る	五二三
黃興先生三週年の思ひ出	五二八
黃興將軍と刺客高君	五三九
湖南行	五五九
廣東行	五六一
解説・解題	五六一

宮崎滔天全集 第一卷



I

三十三三年之夢 『二六新報』明治三十五年一月三十日～六月十四日。  
明治三十五年八月二十日、國光書房刊。白浪庵滔天

落花の歌 『革命評論』明治三十九年十一月二十五日。滔天

續三十三三年之夢 『黑龍』明治四十年五月～六月。滔天

清國革命軍談 『東京日日新聞』明治四十四年十月十九日～十二月七日。宮崎滔天

支那革命物語 『東方時論』大正五年十月～六年十二月。宮崎滔天

# 三十三年之夢



